新村出全集

第二卷

新村出全集

第二巻

筑摩書房

新村出全集第二巻

昭和四十七年七月二十五日　第一刷発行
昭和五十二年五月三十日　第二刷発行

著者　新村出
担当編者　浜田敦
発行者　東京都千代田区神田小川町二―八　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二―八　筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(〇)七六五一(代表)
振替　東京六―四一二三番
印刷　多田印刷株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

言語研究篇Ⅱ　目次

『言語学概論』……7
声音学大意……65
『声音学講話』……103
言語学入門（第五編　意義の変化）……158
言語の慣用……165
羅馬字書方の改正に就て……169
語源知識と語源意識……177
『国語問題正義』（抄）……183
序文185
国語運動と国語教育187
国語問題の根本観念―国語調査に対する回顧と憂慮―
210
外来語是非論238
日本文典の両種―規範的文典と歴史的文典―245
日本辞書の現実と理想279

『国語の規準』……301
序文 303
一　国語の一元化と二重性 304　二　標準語の論 315　三　敬語概説 335
四　語源及語史 352　五　言葉の躾と言葉の嗜み 369
日本語の根本と大和言葉と 384　国語の愛護 396
標準語と方言……414
標準語の問題……416
標準語の採定基準……419
京言葉概観……427
伊豆方言中の星の名と風の名……430
『お筆先』に表れたる方言俗語の一斑……433
南方と日本民族――特に言語上から――……440
南方語との親縁――最近約二十年間の成果――……443
新東亜建設と日本語の問題……445

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国語問題の枢軸……463
昨年に於ける国語学界概観……472
国語界――明治三十二年文藝学概評――……485
カ、オ、エルドマン著『語詞の意義』(DIE BEDEUTUNG DES WORTES――K. O. Erdmann)……488
ソースュール『言語学原論』――言語学界の新機運――……489
言語学者としてのチェンバレン先生……492
露伴翁の言語研究……498
解説……浜田　敦　505

新村出全集　第二巻　言語研究篇Ⅱ

『言語学概論』

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

緒言——概論の早計——言語学史の通観——言語の哲学——国語学と言語学——インド及ギリシャの国語学——日本および支那の国語学——国語学言語学の東西対照——ギリシャ文典の創始——ギリシャ文献学——ギリシャ言語学の特徴——インド言語学の優越——十九世紀の新言語学——比較的歴史的言語学——哲学的より歴史的へ——印欧比較言語学——哲学的研究の潮流——パウルの言語史学——その影響——近世欧洲における国語学と言語学進歩の常道と——言語の比較と方言の比較——我国近時における方言比較——サンスクリットの光明——イェスペルセンの豪語——旧系統の日本国語学——一般言語学の僭称——東洋言語学の抱負——東洋自主の言語学——日本における試みの二三——非専業的な国語学者と言語学者
国語の規範的な見方——尚古観念と標準意識——日本の標準辞書——『和名抄』と『爾雅』——日本の歌学書と仮名遣——インドの語学書の多面性——ギリシャの言語論——ギリシャの語法学——インドとの対比——文典の拘束力——日本の場合——言語信仰と言霊観——言語規範上のアカデミイの興隆——日本における規範観念の無力——イェスペルセンの論拠——日本の言語学と国語運動——西洋言語学の功過——ロオマ字問題——日本文典の規範性——明治以降の文典と以前の文典——文典の各種——内外人の名著数種——十八世紀の一般文法——方言の調査——旧時の国語調査会における方言調査——方言の撲滅といふこと——方言調査の態度——方言の価値——方言の古さ——方言愛護の精神——国語教育の功利主義と能率主義——フィロロギアと言語愛——ロゴスとノリ——文学と語学——博言と言語学——国語学即言語学——日本の現代哲学
比較言語学は言語学の全部にあらず——マクス・ミュラアとホイットニイよりの感化——日本語の系統——東洋諸言語の比較研究——白鳥金沢二氏——上田氏の国語研究室の設備——パウルの紹介——旧時国語調査会の事業——国語史料さまざま——西洋言語学書の訳述——パウルの『言語史諸原理』——スキイトの『言語史』——フンボルトの所謂エルゴンとエネルゲイア——物か力か——言語の経歴過程——個々の国語への適用——方言の研究価値——パウルの綴字改良反対論——自国語より他国語へ——先づ自己を知れ——比較と歴史——気まぐれな比較研究——外来語の研究——往古の外来語と現今の外来語——眼前の国語世相——現代語の史的考察——パウルとソッスュウル——日本

最近の方言学――柳田氏の業績――再びスキイトの『言語史』――フランス系統の言語学――近代現代の自国語研究――日本音声学の今昔――エドワアヅ氏の事ども
言語史学と言語心理学――音韻変化の一事例――「P音考」
大学及諸学校における国語学と国語科――口語の練習――心理学的説明――超時的と歴史的――論理と心理――口語文典――文典の根本的革新――今の力――口語の活用形――口語の流転性――口語の混沌性――『万葉』「東歌」の動詞活用形――古代国語における音韻相通――中古語の音便――活用形に散在せる音便――論理学の羈絆を脱して――音韻の分解的研究と綜合的研究――用語の選択――意味と語感
敬語の重要――敬語の尊重と破壊――国名の支那と中華民国――外来語と流行語――個人の言語閲歴――インチキと彼氏――言語の能率――愛国か能率か――語源論――民衆語源感と通俗語源考――漢字と語源意識――宛字
音韻の規則――音韻法則の可能不可能――原理と事象調査――言語心理学と言語史学――結語
〔補遺〕言語の統計的研究――超時的研究よりの期待――音韻規則の厳守

日本文学講座の最初に南蠻文学について書いた私は同じ講座の最後に言語学概論について書かねばならぬ因縁に際会した。与へられた余裕と紙数との寛大であつたにも拘はらず昨今の押詰つた公私の事情は私をして遂に概論中の序説くらゐを辛うじて草せしめるだけの余日しか与へない。読者と編者とに対して心苦しく思ふ。私はむろん最初から概論を概論として書くよりも、むしろ日本文学講座中のものとして、主として日本の言語文字文学の研究に少しでも参考になる様な実質と形式とに概論を書いて見たいと思つてゐたのである。私はすでに『東方言語史叢考』（本全集第一巻）の序文等に於て自白したやうに元々自分の母国語より言語研究に向つて出発した。自分の国語の現在および過去の状態の観察と説明とから発途して時に国語の将来の趨向に対する見解を作り進んでは出来るだけ同じ方法によつて遠近古今の他国語との対照や比較を試みつゝ言語一般の研究に向つた。従つて自分の此の小心ながら堅実な態度からすると、特に此の種の講座中に於て言語学の概論めいたものを書くのが、最も適当な仕業であらう。

回顧してみると、自分は口に筆に幾度となく西洋の言語学説の或るものを紹介し祖述したこともあり、今尚ほそれを決して無用とは思はないのであるけれども、西洋系統の言語学がその端緒を昔も今もそれぞれ自国当代既往の言語の研究から発して漸く自国同系乃至所依の言語の研究に及んでゆき、それから一般的な原理や法則や方法やを生み出したと同じやうに、私たちも自国語を通して言語一般を透視し、それに由つて或は日本流の或は東洋式の言語学なるものを生み出したいと希望するものであるから、西洋言語学の啓発を受け其の学説に拠りつゝも自国語に於ける観察や反省や適応性の批判やを閑却することを戒めつゝ今日に至つた。かう考へ来たると、実は概論などと銘打つたものを著はすことは早計とも僭越とも思はれ、幾多の学徒が特殊研究と考証三昧とに耽り安全地帯を選んで立命してゐる態度が愈々尤だと思はれる。然し特殊研究が概括研究を促がし、概括研究が特殊研究を導くのが学問進運の要諦たるべき筈であることは今更言ふ必要もなき所であつて、西は西、東は東、と安易な諦めをせずに、西説東論を検討しつゝ一応の概論たる先進の西説の目安に由つて自覚自主以て東論を進めてゆくことは差支ないと信ずる。私の本稿の主眼とする所は、上述の如き意味での言語学概論序説である。

言語学史を通観すると、古来いづこの国の言語学も先づ国語学から発達したことは多言を要しない。その国語学が同時に言語学になつたのは、その国に哲学があつたかなかつたかに由つてもきまり、又言語の哲学的見方が存在したか否かで定まる。ギリシャ及びインドの如き哲学的思索に長じた古代文化民族に当該国語学を超越した所の言語学が生れたのは当然である。殊にギリシャに於ては特殊の国語研究が顕はれてくる以前に、国語を通しての言語学が生れ、インドに於ては、言語哲学と対立して精緻な国語学が発達したのは、共に異数である。支那に於ては古くから哲学なきにあらずして而も国語学は、文字と音韻と語釈と語彙とに関して綿密な考察と広汎な編輯とが行はれたりしたが、西説渡来以前に在つては言語学は無かつた。但しこゝでは国語学の意義をば当該国の言語の特殊研

究の意義にとり、言語学の意義をば、当該国の言語に依る一般研究の意義すなはち哲学的研究なり比較乃至対照的研究なりの概括研究の意義に考へた上での論であることは申すまでもない。然し言語学の名をば、寛大に其の国の零細な言語の学問といふ意味に解すれば、国語学も亦其の国の言語の学問であるのだからそれは言語学に違ひないのだと言ふことが出来ないわけはない。かの意味に於て古代文化民族にはそれぞれ言語学が成立つたと言ひ得るのである。例へば日本に於ても、言語哲学はむろんなく、また言語一般を国語によつて見越した概括研究はなくとも、国語学と同義の言語学は存したと云へる。支那に於ても此の意味に於ける言語学は存立したと云へるのであるが、畢竟するに日本と支那も国語学だけであつたのである。

然しその国語学の業績と価値とは、それは特殊研究の範囲内においてではあるが、決してギリシャやロオマなどに比して見劣りがするわけではない。年代もちがふから時代錯誤に陥る嫌はあるけれども、十九世紀以前の欧洲諸国のそれぞれの国語学を日本や支那の国語学と対比して見ると、哲学的論理的根拠の多少こそあれ、特殊研究の領域に於て或は編輯された業績に於て、東洋がはの実績は、むしろ勝れてゐる所があると思ふ。ドイツの言語学者ガベレンツが、どこまで日本の国語学上の実績を知悉して言つたかどうか怪しいのみならず、日本の学術史に関する彼れの智識のおぼつかなさを私たちは疑はないではないけれども、彼が我が国語学の卓越さを認識して居たことは注目に価する。然し其のガベレンツが韓愈の語を引用して支那の言語哲学を一言した点の如きは見当違ひである。ともかくも西域のインドとギリシャ、又は欧洲のギリシャとロオマ、それらに対して極東の支那と日本、東西それぞれ言語学の特徴なり長短なりの対映は著しく眼につく。即ち極東和漢の国語学は、西域に於ける印度希臘の国語学が当該国語の特殊研究の域を超越して一般考察の域に進むべき根拠を作つた哲学的基礎を欠いてゐた点だけは争はれない。ロオマ時代及び近世以前の言語学乃至国語学は、ギリシャの紹述と適用とにすぎざる程度のものであつて、近世における博言学的傾向といくらかの比較的方法とを除けば、これを大観するにギリシャに比して出藍のほ

まれを有するとは言はれない位なものである。ギリシャの国語学は、初めは哲学者の研究の余材にすぎざる観をなすが、後代文献学者の手に移つてからギリシャ語法学の発生となり哲学者が遺した品詞論や音韻論とむすびついて西洋文典の組織となつて、百世の規準を構成して最近世における其の補充や反逆が現はれるに至るまで、永く世界の典型を作つてしまつたやうな偉大な発展を遂げた。言語起源論や音義相関論や類推論や品詞分類法の如き一般言語学上の諸問題を別にして、ホメロスの古典の校勘や解釈などに始まつた文献学的な考証学風が、言語哲学的な考察と相俟つて、互に論と証拠との出し合ひとせりあひとで、論より証拠、証拠より論、とそれからそれへとしのぎを削つて、遂に語法学上の語形論品詞論文章論の構成を促がした始末は、国語の特殊研究と言語の一般研究との対立が円満に解決された古今独歩の適例であつて、私たちが壮時ギリシャの言語学史を通読して覚えず快哉を叫んだのも此の点に存した。印度系統の東洋言語学説の要素が十八九世紀の交に希臘系統の西洋言語学の停頓した状態に新鮮な潑剌たる精神を鼓吹して、一方独逸に発生した浪漫学派のいきいきした物の見方と国土民俗のうひうひしい資料の取扱ひとの両面からの影響も手つだつて、印度伝統の語詞分析による比較語法学、日耳曼亜独特の音韻変遷史、これらの新潮流が十九世紀初期の欧洲言語学界に起り、それらの比較的歴史的方法すなはち実証的な学風が新言語哲学とむすびついて、そこに新に言語学が更生したとも誕生したとも云はれる様になつた。東西古今の国語学が欧洲の地に於て互に接触し相合流し、一般言語学的乃至言語哲学的な考察と結びついたわけである。新言語学の主潮は、先づドイツの地に於て、一方には国語史あるひは同系諸民族語史すなはち広汎な意義での国語史を発生せしめ、他方にはいはゆる印度欧羅巴同系諸言語の比較文典や語源集彙の編輯を促がした。従つて、デルブリュックが『印欧言語学入門』の旧版本の末尾に於て、「言語学は今や哲学時代より史学時代に入つた」と云ふ文句で、此の簡明な入門書を結んだが如く、比較的歴史的主潮が横溢して広哲学的考察は背景に引込んだ趣が明かに認められた。例へばドイツに於て国語史学とも比較国語学とも言へば言へるのであつた。これはもちろん一般言語学に対してのこ

とであるが、名は言語学と云つても、実は印欧系比較言語学が主であつて言はば僭称であつた場合が最も多かつたのである。一般的綜合的な或は理論的な言語学は、フンボルト以後、シュタインタアル等の泰斗が出たにしても、とかく本流から遠ざけられがちであつた。それにした所がドイツの国語学でも比較言語学でも、部分部分の点についてでも決して一般理論的考察を忘却して居たのではなかつた。それはパウルが幾多の国語史考のほかに言語史の諸原理をめざしたのも、結果に於ては欧洲諸国における国語史の新研究を促がし、イギリスに於てすらスキイト其他に大きな感化を及ぼしたのみか、ヴントに於て言語の民族心理的考察を影響した点が相当に深かつたことは、其の自序に一言してある通りである。古くは英のスキイト、近くは仏のブリュノオ、これら二老家の如きも、やはり国語学より言語学に及んでゐるが、誠に言語研究の常道を歩いたものと言へるのである。古代は前述の如くであるが、近代に於ては、ライプニッツの創唱によつてドイツの国語乃至はゲルマニアの諸民族語の史的考察が進められて、外にはインド国語学の刺戟を受け、内には欧洲中世近世の国語史料を文書と方言との二方面からの蒐集や採訪に待ち、之を貫くに哲学的心理学的考察を施こした結果として、近世の欧洲に於ても国語学が言語学への第一階梯であつたことは当然の道であつた。比較言語学といへども堅実な国語学よりの寄与なくしては決して基礎が成立つたはずがない道理である。況んや広く異邦殊域の古い言語の比較に依らずとも、狭い範囲内に於て、之を稍大きくすれば同分派の諸民族語を克明に比較するなり、之を小さくすれば一国内の方言土語をたんねんに比較するなり、材料の精緻さへあつたならば、方法の正確さへあつたならば、比較言語学は必ずしも大げさに古今東西の広汎な範囲に渉らずともより正確に小規模ながらも成立ち得たであらうことは疑ない。これは遠く欧洲近時の方言研究の成果や方法を俟つて推論し得るまでもなく、尚更百年前の丁抹のラスクや独逸のグリムを引張つて来るまでもなく、日本で手近かな柳田氏の『蝸牛考』にあらはれた如き成果と方法とを以ても容易に察知し得る所であらう。サンスクリットなどの智識を仰山に利用せずとも、アイスランドの島言葉などを土台として北欧語やゲルマニア系の諸民

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com